

自然資源を開くもうひとつの経路

—アイルランドにおける農村アクセス問題を事例に—

京都大学 北島義和

1 目的

現代アイルランド農村においては、農地を所有する農民と、レクリエーションのためそこを歩きにやってくるウォーカーとの間で対立的な状況がしばしば生まれている。一般に「農村アクセス問題」と呼ばれるこの問題は、地域の自然資源はいかにその外部に開かれうるかという環境社会学的な問いと深くかかわっている。これまでの研究においては、利害関係者による「対話の場」を設置することや、外部者利用のコントロールをおこなう「システム」を構築することが、地域の自然資源を外部に開く主要な経路として描かれてきた。しかし、農村アクセス問題においては利用者が一般公衆にまで拡大するため、対話の場を通じた信頼の醸成は容易ではない。また、財政的あるいは物理的な理由から、システムをうまく構築できない状況に陥ることも少なくない。本報告では、そのような問題を抱えたアイルランド農村における調査から、対話の場ともシステムとも異なる、第三の自然資源の開かれ方を示す。

2 方法

アイルランド北西部の丘陵地帯において、ウォーカーによって利用される農地を所有する農民25人に対して聞き取りをおこなった。この丘陵地帯では対話の場やシステムがうまく機能しておらず、アイルランドの中でも農村アクセス問題が特に先鋭化した地域として知られている。

3 結果

聞き取りをおこなった農民の多くが農村アクセスの現状に不満を抱いているものの、実際にウォーカーのブロックに乗り出したことのある農民はそれほど多くなかった。これについて農民からは、「土地は自分が生まれる前にも、死んだ後にもそこにある。だから、ウォーカーを止めるべきではない」という語りがしばしば聞かれた。つまり、これらの農民は、自らの土地所有は家族による土地継承の歴史の一部に過ぎず、ウォーカーをブロックする行為はそのような身分の自分には行き過ぎだと考えているのである。しかしその一方で、ウォーカーのブロックをおこなった農民も、「土地は将来もあるのだから、ウォーカーを止めなければならない」と、ウォーカーを許容する農民と同じ論理をブロックの理由として用いた。これは、「土地を適切に管理された形で次世代に相続する」ということが双方の農民にとって重要なのであり、それが満たされていると考えられている限りウォーカーはブロックされないが、それが脅かされる契機が感じられた場合にはブロックがおこなわれるためである。

4 結論

本報告で示したような農民の土地所有感覚は、地域の人々の実践自身の中にも、地域の自然資源が外部に開かれる経路が存在していることを示している。そのため、対話の場やシステムの構築が機能不全に陥っている場合にも、この経路を通じて公衆による地域の自然資源の利用は保証されうるのである。ただし、上述のように現状に不満を持つ農民も少なくなく、このような経路は、アイルランドにおける農村アクセス問題の包括的解決策として機能しているわけではないことも留意すべきである。